

探究的な学習プロセスについての考察 : 総合的な学習の時間「防災」の実践モデルから

著者	松尾 和宣
雑誌名	教育総合研究叢書 = Studies on education
号	13
ページ	117-127
発行年	2020-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000584/

探究的な学習プロセスについての考察

－総合的な学習の時間「防災」の実践モデルから－

A Study on the Exploratory Learning Process : From the Practical Model of "Disaster Prevention" in the Period for Integrated Studies

松尾 和宣*

Kazunobu MATSUO

抄 録

2019年（令和元年）文部科学省は、新たな教育施策として、「GIGAスクール構想～令和時代のスタンダードとしての学校ICT環境を整備し、全ての子供一人一人に最もふさわしい教育を～」を打ち出した。Society5.0の時代を生きる子供たちへの最適な教育環境を創る意図が見える。新学習指導要領の理念を実現させる一要素となると期待できる。「予測困難」な時代の到来に向けて、新たな教育が始まっている。学校教育には、子供たちが様々な社会の変化に積極的に向き合い、他者と協同して課題を解決することが求められている。この実現の中心的な役割を果たす学びが総合的な学習の時間であると考え。総合的な学習の時間のねらう「探究的な学び」が、子供たちに予測困難な時代に向き合う資質・能力を育成する可能性を感じる。

この論文では、学習指導要領改訂から見えてきた総合的な学習の時間の課題と可能性を明らかにし、実践的な授業モデルについてまとめていきたい。

1 学習指導要領改訂と総合的な学習の時間

(1) 学習指導要領改訂のねらい

今回の学習指導要領改訂では、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指している。

その実現を目指し、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、次の6点にわたっての改善点が示された。

- ①「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）
- ②「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）
- ③「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）
- ④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」（子供の発達を踏まえた指導）
- ⑤「何が身に付いたのか」（学習評価の充実）

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

⑥「実施するために何が必要か」（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）

今回の学習指導要領は、東京オリンピック・パラリンピック大会の10年後、2030年の社会をイメージして作成されている。日本は、生産年齢の人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、予測困難な時代となっている。子供たちが成長し社会を担う頃には、厳しい挑戦の時代を迎えると予想される。

「厳しい社会に挑戦できる子供を育てるために、資質・能力について新たな視点を加えよう」

「そのための授業改善として『主体的・対話的で深い学び』での授業改善が必要」

「社会に開かれた教育課程を目指すカリキュラム・マネジメントが必要」

等のサイクルでの新しい教育の在り様を考える必要に迫られている。

(2) 総合的な学習の時間の目標構成

新学習指導要領では、先に示した改訂の趣旨を明確にし、以下のような目標を設定している。

第1 目標

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方考えていくための資質・能力を次のように育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

前文では、「横断的」「総合的」「よりよく課題を解決」「自己の生き方を考えていく」というキーワードを通して、総合的な学習の時間の特質を生かした学習の在り方を表現している。

次に総合的な学習の時間を通して育成する資質・能力について、(1)(2)(3)として示している。育成することを目指す資質・能力は、他の教科等と同様に、

(1) は、総合的な学習の時間を通して育成をめざす「知識・技能」

(2) は、「思考力、判断力、表現力等

(3) は、「学びに向かう力、人間性等」

を示している。

今回の改訂のねらいを明らかにするために、平成20年（2008年）改訂の目標と比較してみたい。

第1 目標

横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協働的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

新学習指導要領の目標が「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して…」に対して、平成20年（2008年）目標は、「横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して…」とある。これは、学習の過程において、「横断的・総合的な学習」もしくは「探究的な学習」

いずれかを授業者が選択すれば、ある意味総合的な学習の時間の要件が成立するとも読み取れる。

しかし、平成29年（2017年）改訂では、「横断的・総合的な学習」、「探究的な学習」の両方がなくてはならないと変化していると考えられる。つまり、「探究的な」学習過程を辿りながら、学習の対象や領域が、特定の教科等に留まらず、「横断的・総合的」でならないことを意味している。

「探究的な学習の過程を総合的な学習の本質と捉え、中心に据えることを意味している」（学習指導要領第2節 目標の趣旨）の言葉の示すように、今回の改訂では、探究的な学習の重要性が主張されている。

次に、「探究的な見方・考え方」「横断的・総合的な学習」の内容について考察を加えていきたい。

(3) 探究的な見方・考え方

子供たちは、日々の暮らしの中で、様々な疑問や関心をもって生活している。身近な自然や社会的な出来事等について湧き上がる疑問や関心について、

- ・自ら課題を見つけ、（課題の設定）
- ・具体的な問題に関する情報を収集し、（情報の収集）
- ・その情報を整理・分析したり、（整理・分析）
- ・これまでの経験や既習事項から得た知識や技能に結び付けたり、または仲間と考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、明らかになった考えや意見をまとめ、表現する
(まとめ・表現)

の過程を踏んで課題解決に向かう。

また、このような過程を踏むことで、新たな疑問や関心が生まれ、新たな探究活動に入っていく。

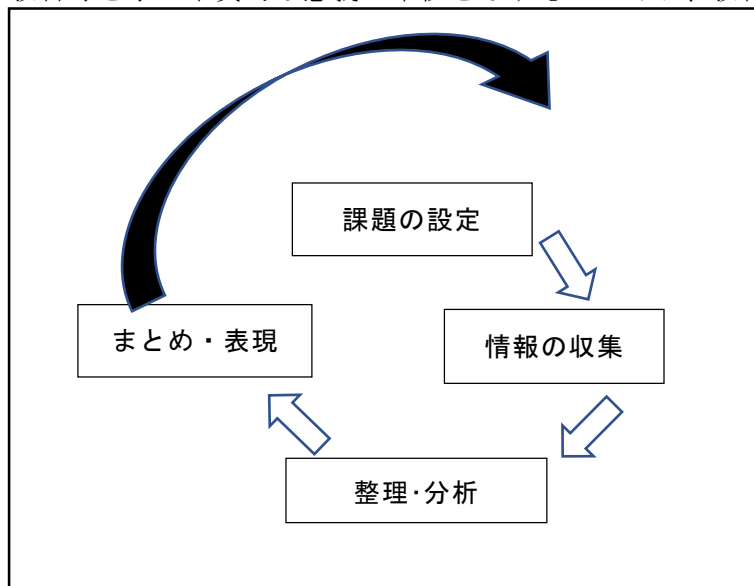
探究的な学習過程は、まさに子供たちが日常的に行っているか課題解決のプロセスではないだろうか。探究的な学習とは、「問題解決的な学習が発展的に繰り返される一連の学習活動」のことである。

また「見方・考え方」とは、総合的な学習の時間だけでなく、他の教科等でも同様の表現を今回の学習指導要領では用いている。「見方・考え方」とは、『「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものである』と

学習指導要領解説総則編では定義している。

各教科等にはそれぞれ、各教科等の理論と学ぶべき本質的な意義がある。総合的な学習の時間の本質的な意義の中核は、「探究的な見方・考え方」であるということが言える。「探究的」な学習過程が無ければ、それはもはや総合的な学習とは言えないといっても過言ではない。

総合的な学習の時間の目標の冒頭の、「探究的な見方・考え方を働かせ…」と

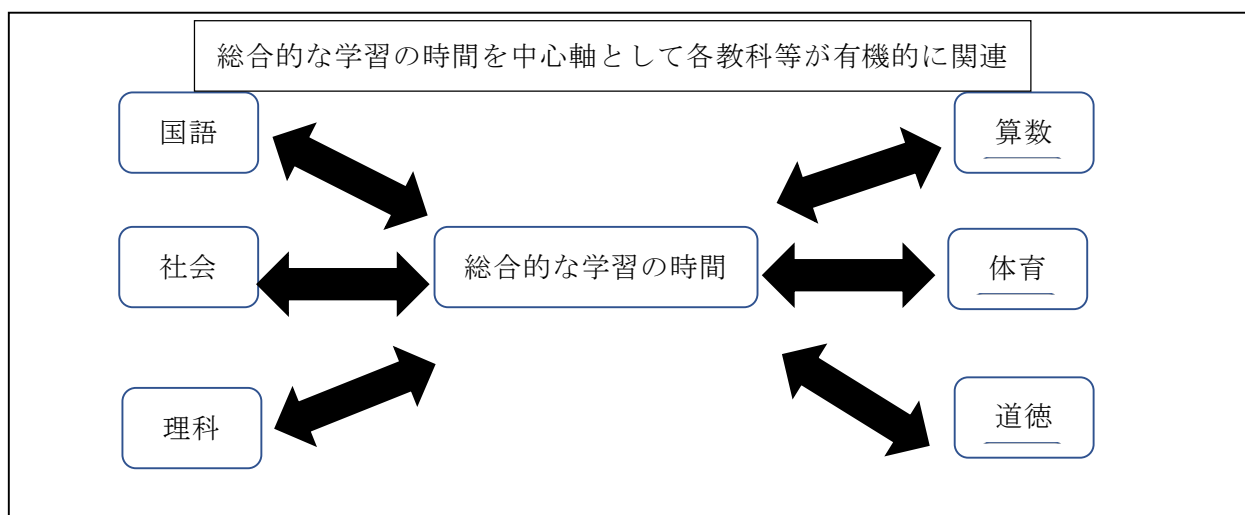


は、総合的な学習の時間だけに限定されるものではないと考える。「横断的・総合的な学習」と関連併せて読むと、他教科等での見方・働き方を横断的かつ総合的に働かせることを意味していると考えられる。他教科とは違う総合的な学習の時間の難しさがここにある。

(4) 横断的・総合的な学習

「横断的・総合的な学習を行うというのは、この時間の学習の対象や領域が、特定の教科等に留まらず、横断的・総合的でなければならないことを表している。言い換えれば、この時間に行われる学習では、教科等の枠を超えて、探究する価値のある課題について、各教科等で身に付けた資質・能力を活用・発揮しながら解決に向けて取り組んでいくことでもある。」（小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 平成 29 年 7 月）

学習指導要領解説編で例示されている、国際理解、情報、環境、福祉、健康などの諸課題に対応する横断的・総合的な課題とは、現代社会において、解決を要する切実な課題でもある。例示だけに留まらず、防災、食、科学技術等、子供達の生活の中には、自分のこととして考え、よりよい解決に向けて行動しなければならない課題がある。これらの課題にはもちろん正解はない。また、従来の各教科等の枠組みに中ではとらえきれない課題でもある



2 実践モデル～防災教育－阪神・淡路大震災を素材にした実践モデル～

「横断的・総合的」な探究課題について、現代社会では、避けては通れない「防災」を例に考えてみたい。

総合的な学習の時間としては、1995年に発生した阪神・淡路大震災をテーマに、まずは、震災の事実を知ることから学習をスタートする。そして、復興の過程、地域の防災対策等を考える過程を通して、新たな自然災害についての「自助」「共助」について考えを深め、防災意識を高めていくことをねらいとしたい。

この「防災」は、総合的な学習の時間だけで完結するものではない。他の教科等で身に付けた資質・能力を活用しつつ探究的に課題を解決する過程が必要である。総合的な学習の時間と関連する他の教科が有機的に結び付き、相互に作用しながら、子供たちの資質・能力を高めていくものである。

例えば、総合的な学習の時間の活動の中で必要な、聞き取り調査、仲間との議論、活動のまとめ

としての報告等は、国語科の支えがあって成立する学習である。国語科の「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を活用したものである。また、総合的な学習の時間の活動が、国語科で育成をねらう資質・能力を高めるという作用も当然あり得るものである。

また、理科では、自然災害が発生するメカニズムを科学的に学んでいく。自然災害が発生するメカニズムを理科し、地域や自分の命を守るための方策について考えを巡らせることにつながる。理科の「自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力」を活用し、関連付けて活動させる必要がある。

また、特別の教科道徳においては、「生命の尊さ」「勤労、公共の精神」「よりよく生きる喜び」等の内容項目に応じて、「防災教育」を支える子供たちの心情をゆさぶり、「命」「地域」を深く考えることにつながっていく。

一方、総合的な学習の時間で身に付けた資質・能力が、「防災教育」というテーマの枠を超えて、一般化されたものとして、他教科等の学びにつながり、生かされていく。各教科等で得た資質・能力を前提にして、総合的な学習の時間の活動を考えることもできる。反対に、総合的な学習の時間で得た学びを各教科等で深めることも可能である。総合的な学習の時間と各教科等の学びは、双方向に連動し、子供たちの深い学びを生み出すことが可能である。

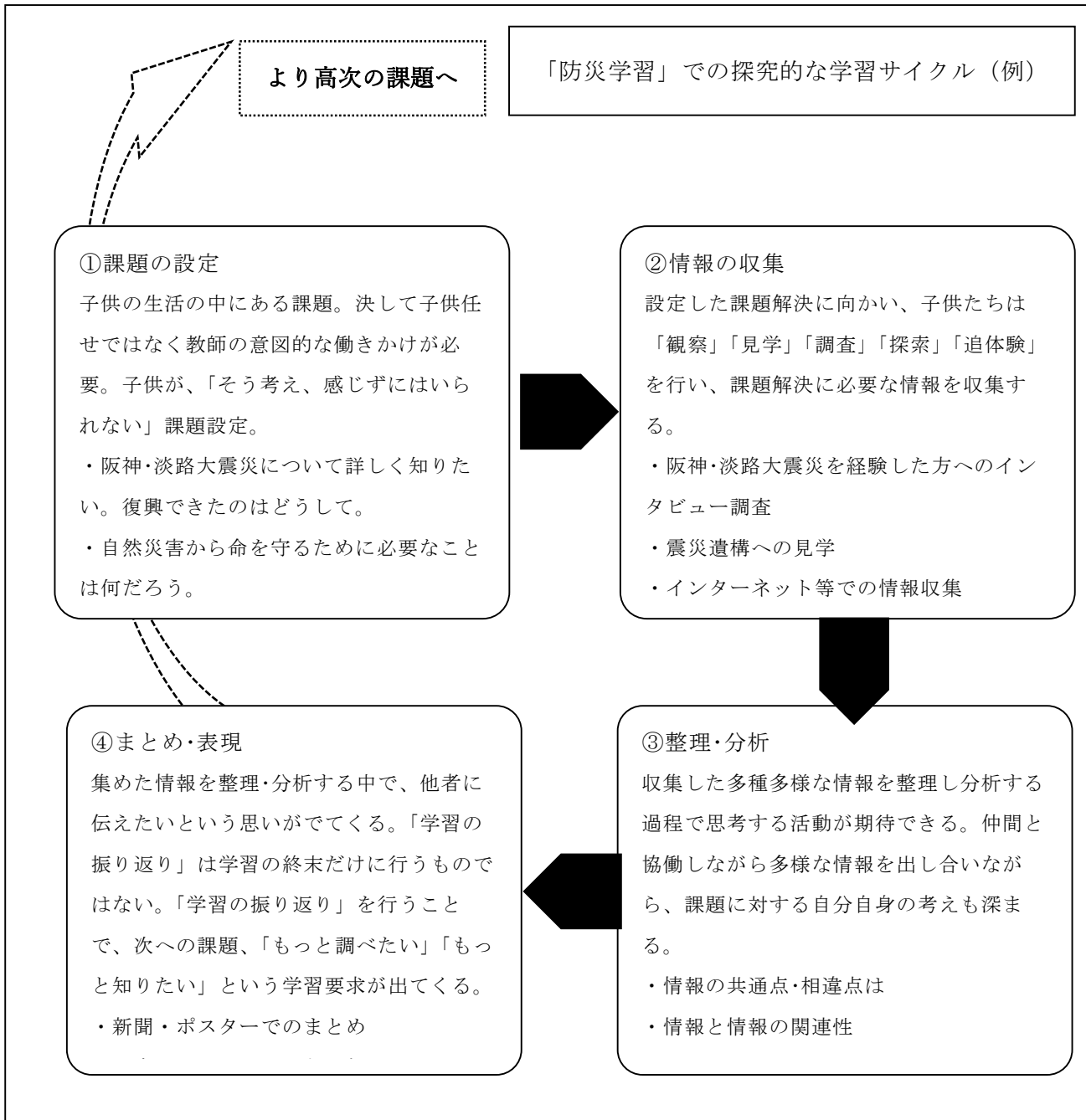
総合的な学習の時間は、多趣多様に仕組むことができる。子供たちの主体的な活動の中で、既習内容・経験が有機的に絡み合い、横断的・総合的な学習が成立していくとも考えられる。子供たちに、予測困難な時代を切り拓く資質・能力を身に付けさせるためには、学校独自の計画的な総合的な学習の時間が必要不可欠である。

○5年：防災教育～阪神・淡路大震災～

(1) 単元構成

総合的な学習	国語	社会	算数	理科	家庭科	体育 保健	道徳	特別 活動
I 阪神・淡路大震災について知ろう	国語（書く） 活動を報告する文章を書こう 次の一歩－活動報告書			社会 わたしたちの国土 ・国土の地形の特色 ・低い土地の暮らし		道徳 かけがえのない命 「命の詩」		
	理科 天気の変化 台風と気象情報 雲と天気の変化			特別活動（学校行事） 避難訓練①		道徳 自分の命を守るために 「命を守る		
	特別活動（校外学習） 人と防災未来センター							
II ○○地区防災マップをつくろう	国語（書く 話す・聞く） 自分の考えをまとめて討論しよう 豊かな言葉の使い手になるためには			社会 情報化した社会とわたしたちの生活				
	理科 流れる水のはたらき 川とわたしたちの暮らし			特別活動（学校行事） 避難訓練②				
	国語（話す・聞く） きいて きいて きいてみよう							
III 自分の命を守る	保健 けがの防止			特別活動（学校行事） 避難訓練③		道徳 家族に感謝して 「おばあちゃんからもらった命」		
	特別活動（学校行事） 1.17のつどい							
IV 神戸からのメッセージ	社会 わたしたちの生活と環境 ・自然災害を防ぐ			体育 水泳・着衣水泳		道徳 社会に役立つ喜び 「クール・ボランティア」		

(2) 実践モデル「防災学習」における探究的な学習過程のイメージ



①課題の設定

総合的な学習の時間では、子供たちがくらしの中にある自然や社会の疑問や関心から、自ら課題意識をもち、その課題を探究的に解決していこうとする意識が大切である。しかし、子供の課題意識を大切にし、全てを子供任せにすることではない。子供に主体的な学習活動を期待するのであれば、教師は、その主体的な活動を導き出すための意図的な「仕組み」を仕掛けることが必要である。子供の主体的な動きを大切にすることは、教師が何もしないでじっと待つことではない。

「人」「もの」「こと」に直接関わる体験活動でも、子供とそれらをどのように出会わせるか、その出会わせ方を教師は工夫する必要がある。その際、子供たちの実態把握、つまり、子供の既習学習、経験からの興味・関心を的確に捉え、教師が出会わせたい「人」「もの」「こと」に「不思議だ」「もっと知りたい」「調べたい」という課題意識をもたせていきたい。

実践モデルとして取り上げる「防災」では、阪神・淡路大震災の事実を知ることから、学習活動をスタートさせていきたい。1995年（平成7年）1月17日の未明の出来事。その時神戸で何が起こったのか。人々はどのように自然災害に向き合ったのか。そして、街の復旧・復興は誰が、どのように取り組んでいったのか。そこから、将来起こりえる可能性のある大地震に対して、自分自身は何をすべきかを探求していく課題が生まれる。

②情報の収集

設定した探究課題にそって、子供たちはその課題解決に向かって動き出す。子供たちは、見学、調査、聞き取りなどを行い、課題解決に必要な情報を収集する。収集する情報は多種多様であり、その情報を収集する手段は、学習活動によって変わってくる。

課題解決に向けて目的的に行う情報収集として、見学やインタビューがあげられる。防災教育においては、自然災害を経験した方々へのインタビューは、子供たちの学習意欲を強く喚起するものである。阪神・淡路大震災のまさに「揺れ」の激しさの体験、震災以降の生活の厳しさ、生活再建に向けての動き、地域の中での協力・連携等のインタビュー調査は、子供たちの学習活動の軸をつくるものであり、今後の探究活動に推進力をつける重要な活動となる。インタビュー調査については、すでに国語科、社会科等でそのスキルやマナーについては習得していると考えられるが、次のような質問用紙を作成することで、課題解決に向けた焦点化した質問ができると考える。また、質問用紙は、後で述べる「情報の蓄積」にも役立つものである。

質問カード

1. あいさつ

○「こんにちは」：元気な声！ えがおで！

「今、おじかんはありますか」：仕事でお忙しいかもしれません。まずは、相手のご都合をききましょう。

2. 自己紹介

○（ ）小学校○年生 名前（ ）です。

よろしくをお願いします。

3. 活動の説明

○今、私たちは、総合的な学習の時間の学習で、（ ）について調べ学習をしています。今日は、（ ）のことを調べたいと思います。ご協力をお願いします。

4. 質問

①

②

③

④

・見学をさせていただく時は、仕事のじゃまにならないように気をつけましょう。
・写真は許可をとってからさつえいしましょう。

5. お礼

○「おいそがしいところ、私たちにいろいろ教えてください、ありがとうございました。」

校区内に残る震災後の更地も価値ある情報になり得る。また震災遺構等も子供たちの心を揺さぶるものになるであろう。

また、情報収集の学習活動で大切なことは、収集した情報をどのような手段で蓄積するかである。

収集した情報はその後の探究活動を深めていく資料である。情報を得た日時、場所、人物等を記録し、ポートフォリオやファイリングの方法で保存していく。また、体験活動や情報収集の過程で子供たちが感じた思い、疑問なども重要な情報である。時間の経過とともに薄れていきがちであるので、学習作文等で言語化して蓄積していく必要がある。

情報は、個人で活用するだけでなく、グループあるいは学級・学年に広げて共有することで、今後の活動である、「整理・分析」にも有益である。また、教師が意図的に準備した資料を情報として提供することも考えられる

③整理・分析

収集した情報を整理・分析する過程で、子供たちの思考は深まっていく。その際、他者、あるいは他のグループが得た多様な情報を出し合ったいくことで、情報の類似性や特殊性が明らかになる。「あのグループも同じような資料がある。大勢の人が体験したことだ」「他のグループにはない情報だ。この情報は特別なのか」等、他者の情報との比較の中で、一般化される事実や新たな疑問が湧いてくる。

収集した情報を単独で考えるのではなく、情報と情報を関連付けて整理し分析することで、課題が多面的に検討され、思考が深まっていくことになる。どのような方法で整理するのか。数値化される情報であれば、統計的な手法でグラフとして表現する。グラフであれば棒グラフが適しているのか円グラフが適しているのか、算数科との関連性の中で子供たち選択していく。また、インタビューから得た情報であれば、紙芝居型式やポスター等も考えられる。ここでも、他教科での学習成果が生かされていく。

④まとめ・表現

課題を設定し、課題解決に向けて多様な情報を収集する。得た情報を他者との協働により分析する。そのような学習活動を経験した子供たちは、「伝えたい」という思いになる。伝えるとう活動を通して自分自身の考えをまとめ、新たな疑問が生まれるという学習活動が期待できる。子供の既習学習、経験と探究的な活動で得た情報につながり、子供の考えが明らかになり、課題が鮮明になり、次への課題が生まれる。

「まとめ・表現」活動は、学習のふりかえりである。ふりかえりは、次の学びへと向かう「まとめ・表現」活動として、教師自身が意識することが必要である。ふりかえりは、学習活動の途中であっても必要であれば行うものである。学習の途中で、課題の探究過程を確かめ、学習活動の修正を行うことも時には必要であろう。こうした振り返りを主体的に行う資質・能力を育てることも重要であろう。

「まとめ・表現」は、具体的にはレポートやポスター、写真等を活用したプレゼンテーションが考えられる。

- ・表現したことを伝える対象を意識する
- ・まとめたり表現することで自分自身の考えを深め、新たな課題を生み出す過程にする
- ・伝えるための具体的なスキルを育てる場とする

ここでも、各教科で培ってきた表現方法が活用される。ポスター作りでは図画工作、音楽での表現、国語科での言語表現等教科等で身に付けた力が使われることは容易に想像できる。

「課題に設定」➡「情報の収集」➡「整理・分析」➡「まとめ・表現」の探究的な学習プロセスは、

単にこれだけにとどめるべきではない。このプロセスで得た学習の成果と新たな疑問を整理することで、新たな探究テーマ、より高次の課題へとつながっていく。これこそが総合的な学習の時間のねらいの一つである。

3 まとめとして

総合的な学習の時間は、小学校現場では教師にとって 扱いづらい 教科ではないだろうか。その理由として、まずは、教科書がないこと。次に、子供・地域の実態、特色に関連付けた指導計画や単元を準備することが必要であることがあげられる。ともすれば他の教科等の時間調整として、総合的な学習の時間が消えていくこともあるように感じる。

しかし、これまでに述べてきたように、総合的な学習の時間は、教科等と教科等をつなぐハブ（HUB）の役割をし得るものである。学校教育のネットワークの中心として、子供たちの学びを創造する中心的な役割を果たす学習活動になる可能性がある。

また、総合的な学習の時間は、教師同士をつなぐ、学校と地域・家庭をつなぐ成果もある。子供たちの学習フィールドは学校内に収まらない。地域全体が学びのフィールドであり、地域住民が情報を与えてくれる存在でもある。また学級単独での活動ではなく、学年全体、あるいは学校全体での共通認識と協同のもとに総合的な学習の時間は展開される。教師をつなぎ、地域と学校をつなぎ、学校を変える推進力も感じる。

小学校での総合的な学習の時間での探究的な学習がどのように行われているのか。小学校から中学校への学びの継続性の課題は何か。今後の課題として探っていきたい。

参考文献

- ・ https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm 文部科学省 HP
- ・ 小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 平成 20 年 8 月 文部科学省
- ・ 小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 平成 29 年 7 月 文部科学省
- ・ 小学校学習指導要領解説 総則編 平成 29 年 7 月 文部科学省
- ・ 新編 新しい社会 5 年上 平成 27 年－31 年度用 東京書籍
- ・ 新編 新しい社会 5 年下 平成 27 年－31 年度用 東京書籍
- ・ 道徳 5 きみがいちばんひかるとき 平成 30 年 光村図書
- ・ 国語 5 銀河 平成 23 年 光村図書
- ・ わくわく理科 5 平成 27 年－31 年度用 啓林館
- ・ 田村 学 2017 「小学校新学習指導要領 ポイント整理 総合的な学習の時間」 東洋館出版社
- ・ 斎藤 孝 2016 「総合的な学習の考える力をつけよう！」 PHP 出版社
- ・ 田村 学 2017 「小学校教育課程実践講座 総合的な学習の時間」 ぎょうせい
- ・ 中尾繁樹編著 2019 「小学校 特別支援教育 指導スキル大全」 明治図書

Abstract

In 2019, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology launched new educational policy of "GIGA School Concept-Improving the School ICT Environment as a Standard in the Reiwa Era and Providing the Most Suitable Education for All Children".

The intention is to create an optimal educational environment for children living in the Age of Society 5.0. It can be expected to be one element that realizes the idea of new curriculum guidelines.

New education has begun toward the "unpredictable" era. Schools are required to make children actively confront various social changes and work with others to solve problems. The author thinks that it is the period for integrated studies that plays a central role to realize these learning. The author considers that "exploratory learning" in the period for integrated studies can develop the abilities of children to confront difficult era.

The author clarified the issues and possibilities of the period for integrated studies through the revision of the curriculum guidelines, and summarized a practical teaching model.